

島津氏の藩営牧の概要及び肝付氏の喜入牧の苙跡現況

中 野 翠

1 はじめに

薩隅日の三州は、歴史的にも馬の産地として知られ、藩政時代には九州一との評判もあった。島津氏が統治する鹿児島（薩摩）藩領内の各地に馬の放牧地である「牧（野牧苑）」が設営された。さらに、毎年二歳の若駒を選別して捕獲するため、牧内に「苙^{おろ}」と呼ばれる土塁で囲まれた馬の追い込み場が造られていた。

今回は、藩主の島津氏や私領主たちが経営した「牧」について、その名称、設置場所及び馬の疋（頭）数、外周の距離などの概要等を、江戸後期に記述された二史料を中心に活用してまとめた。

さらに、各地の牧で毎年1回もしくは2回開催される馬追い（二歳馬の撰別及び捕獲）の中核となる「苙」の形態・規模や機能に関して、「喜入牧の苙跡」（鹿児島市指定文化財）の具体的現況を紹介したい。

2 藩主及び私領主が経営した牧の概要

（1）『要用集⁽¹⁾⁽²⁾』

史料として活用した本書（全六巻）は、鹿児島（薩摩）藩藩政の要務に関する制度等を事項別にまとめたもので、藩政の推移を知る基本史料の一つである。加えて、文政九年（1826）の『薩藩政要録』を基盤とした、嘉永五年（1852）の改編史料である。その史料から、藩経営牧が設

(1) 鹿児島県史料集 (28)『要用集（上）』（昭和63年3月所収、県史料刊行会）

(2) 鹿児島県史料集 (29)『要用集（下）』（平成元年3月所収、県史料刊行会）

『要用集（上・下）』の解説・校正等は鹿純心女短大教授芳即正氏が担当（当時）して、鹿児島県立図書館（県史料集刊行会）が発行した。

置された地域と馬の疋数及び取駒⁽³⁾の疋数等は次の通りである。

ア 県史料集 (29)『要用集 (下)⁽⁴⁾』掲載の「御牧数諸郷牛馬数并馬

追日執之事」

吉 野^(a)

馬数四百四拾七疋

取駒貳拾八疋

蒲生之内

青色野^(b)

馬数七拾六疋

取駒三疋

曾於郡之内

春山野^(c)

馬数貳百參拾六疋

取駒貳拾疋

福山野^(d)

馬数千參百六拾五疋

取駒百拾八疋

末吉野^(e)

馬数三百七匹

取駒拾貳疋

鹿屋野^(f)

馬数參百五拾六疋

取駒拾九疋

穎娃野^(g)

馬数貳百八拾三疋

取駒貳拾四疋

加世田之内

野間野^(h)

馬数四拾貳疋

取駒三疋

伊作野⁽ⁱ⁾

馬数貳百六拾九疋

取駒七疋

市来野^(j)

馬数四百四拾疋

取駒拾六疋

高江之内

寄田野^(k)

馬数四百拾壹疋

取駒拾貳疋

出水之内

(3) 「取駒」とは、牧から苙に追い込んだ馬のうち、二歳の若駒を捕獲すること

(4) 鹿児島県史料集 (29)『要用集 (下)』(平成元年3所収、78・79頁)

島津氏の藩営牧の概要及び肝付氏の喜入牧の莖跡現況

| | |
|----------------------------------|--------------------|
| 瀬崎野 ^(l) | 馬数五百四拾貳疋 取駒三拾九疋 |
| 長島野 ^(m) | 馬数千四拾疋 取駒五拾七疋 |
| 上甌島之内 | |
| 市山野 ⁽ⁿ⁾ | 馬数百疋 取駒五疋 |
| 比志島咬啗吧野 ^(o) | 馬数七拾疋 取駒貳疋 |
| 但 咬啗吧野吉野牧之内有之候処、当分比志島江有之 佐多之内 | |
| 立目野 ^(p) | 馬数貳百貳拾八疋 取駒九疋 |
| 東郷之内 | |
| 笠山野 ^(q) | 馬数貳百貳拾八疋 取駒九疋 |
| 合牧数 | 拾七ヶ所 |
| 合馬数 | 六千貳百七拾三匹 |
| 合取駒 | 三百八拾九疋 |
| 右嘉永四亥年馬数 | |
| 外鹿児島郡吉田之内 | |
| 当分無之候 | |

一 諸郷牛馬数野事

一 牛四万五千六百七拾壹疋

- (a) 現・鹿児島市吉野町 (b) 現・始良市蒲生町 (c) 現・曾於市
 (d) 現・霧島市福山町 (e) 現・曾於市末吉町 (f) 現・鹿屋市
 (g) 現・南九州市顚娃町 (h) 現・南さつま市笠沙町野間 (i) 現・日置市
 吹上町 (j) 現・いちき串木野市 (k) 現・薩摩川内市高江町
 (l) 現・出水市平和町「出水ゴルフクラブ」付近 (m) 現・出水郡長島町
 (n) 現・薩摩川内市 (O) 現・鹿児島市皆与志町 (p) 現・南大隅町佐多
 (q) 現・薩摩川内市東郷町鳥丸

一 馬拾四万六百八拾疋

右嘉永四年改数

一 御馬追日執之事

四月中 辛丑日 辛巳日 辛酉日

若四月中右之日執無之節ハ五月差入而

乙亥日 丁亥日 己亥日 辛亥日

八月中 丙寅 戊寅 壬寅 乙寅

丁寅 己寅 辛寅

右春秋御馬追日執、前々卯辰之日為有之由候得共、寛陽院様⁽⁵⁾御代、右日執天和三年⁽⁶⁾亥三月九日被仰渡、其以後、右日執相考申上候、

以上の事項を記述した『要用集』によれば、嘉永四年（1852）時点で、17カ所の藩営牧が設置され、馬6273疋、二歳の若駒の捕獲が389疋であった。また、藩内各郷の農民・町人が所有していた馬は14万608疋であったことが分かる。さらに、馬の捕獲回数は四月と八月の2回と定められていた。但し、藩内の離島に関しては、上甕島以外は記述がない。

イ 『要用集（上）』所収「御関狩并吉野御牧之事⁽⁷⁾」

「吉野牧」等に関する記述の要約は以下の通りである。

古老が申し伝えていることは、関狩と馬追いは「軍事の習せ」と意義付けている。また、鹿児島城下に最も近い吉野牧に関しては、島津氏家臣である川上家先祖の川上久隅が吉野牧を設置した。その子孫の川上久馬が初代藩主島津家久に、慶長年中（1596～1614）に吉野牧を献上した。藩主家久が直接現地に来られた際は、川上久隅も随行して案内した。この経緯については、慶長九年（1604）8月19日付の文書に残されていると言う。

以上のことから、初代藩主家久のみでなく、歴代藩主が吉野牧を藩営牧として管理運営したと理解できる。毎年二回開催の馬追いは城下士の軍事訓練の場と位置付け、藩の非常事態にも備える重要な意味を持っていた。

(5) 島津氏29代当主・2代藩主島津光久

(6) 1683年

(7) 『要用集（上）』56・57頁

(2)『三國名勝圖會』上・中・下巻⁽⁸⁾

本書は、鹿児島(薩摩)藩領内の薩摩・大隅国及び日向国の一部である諸縣郡の自然・寺社・物産・牧野(牧野苑)等について(一部風景挿絵付)、各郡ごとにまとめ上げたもので、全60巻から成る。天保14年(1843)、10代藩主島津齊興の頃、五代秀堯を総裁とした上で、橋口兼柄^{ひでたか}らが藩命を受けて編纂した貴重史料である。

現在刊行されている『三國名勝圖會』は、明治38年(1905)刊行の和綴本20冊を基に、昭和41年(1996)に上・中・下の3冊で復刻された史料である。その中から藩領内の牧野等に関する記述を抜き出して紹介する。

ア 吉野馬牧府城の北*記述が長いので要約。但し「」は原文の記述通り、

鹿児島城の北側に位置する吉野村⁽⁹⁾に在り、「隣郷吉田重富帖佐の地に係る」。「周匝^{シウソウ}(外周)七里」の放牧場である。馬数は約「四百」疋、「牧司^{ムクシ}」が馬の養育を担当している。「毎年四月駒二歳馬^{コマ}」を捕獲している。「此之式を馬追^{ムマヲヒ}と云」う。其の日は「有司」(担当役人)若干人と、数郷(「当郷、谷山、郡山、蒲生、吉田、帖佐、加治木、始良郡山田、國分、櫻島、伊集院等)の「民」を総動員して「牧野」の外周に分担場所を割振る。その際にはいくつかの「法」(手順)がある。「旌旗」を大きく振りながら、「海螺^{ホウラ}」を吹き、それを合図に住民らは「竹木を揮ふて」(竹木を振りまわしながら)、「隊伍」を乱さぬよう注意しつつ、逃げ回る群馬を追いかけて包囲の囲みを縮めて行く。加えて、騎馬武者約100騎が八方に「駈馳」(走り回って)徐々に囲みを狭め、号令と共に群馬を「荳^(おろ)」に追い入れる。

「荳」とは、地面を数尺掘り、その外側に土塁を築く。土塁の内径は、長い方の長さが数十歩あり、その中に群場全てを追込み施設のことである。

イ 咬啗^{シャカタラ}吧馬牧府城の北

比志島村⁽¹⁰⁾にあり、吉田⁽¹¹⁾當郡及び郡山⁽¹²⁾の二邑に係る、

(8) 発行所 南日本文化協会(鹿児島市鴨池町304番地)

(9) 現・鹿児島市吉野町の県立吉野公園からゴルフ場・寺山ふれあい公園一帯

(10) 現・鹿児島市皆与志町一帯

(11) 現・鹿児島市吉田町一帯

(12) 現・鹿児島市郡山町一帯

- ウ 市來野牧場苑地頭館より東方二里許、
養母村⁽¹³⁾、長里村⁽¹⁴⁾、湯田村⁽¹⁵⁾、川上村⁽¹⁶⁾の四ヶ村に係る、周回
り六里一町、馬数三百余疋を畜牧す、
- エ 牧野地頭館より申方一里半余、
寄田村、高江村、久見崎村の村⁽¹⁷⁾に属して、寄田の地廣く係れり、
世に寄田野牧と呼ぶ、倉掛山、長尾山、小牟禮山、笠山野牧、神尾
野等の山野に亘り、周圍六里二町許、馬疋凡三百、毎春駒を取る、
素より本藩牧野多くありて、良馬乏しからず、中に就て當産の馬、
其性必ず善し、貞治年⁽¹⁸⁾、定山公⁽¹⁹⁾比牧野を、執印左衛門大夫友雄
に託し給へる御教書あり、これを以て考ふれば、其ノ初しめ猶久し
きを知る、
- オ 長野牧場苑領主館より辰の方二里
裏之名村⁽²⁰⁾にあり、周廻二里許、馬数四五十疋を牧す、往古は
八重山の内にありしが、後世今の地に移せり、
- カ 笠山野牧場苑地頭館より寅の方、一里余
斧淵村、南瀬村、山田村、鳥丸村⁽²¹⁾に亘る、馬百七拾餘頭を牧す、
- キ 瀬崎野牧場苑地頭館より戌三里半、
知識村⁽²²⁾西目にあり、往古本田静観、始て馬を畜牧せしと舊記
に見ゆ、静観は本田貞観が随號なり、今周廻五里余ありて、馬五百
餘頭を畜ふ、
- ク 九尾野牧領主館より辰巳方、二十七町余、
宮之城村⁽²³⁾にあり、周廻三里余、傳に云く、往古此牧の峯頂に、
鎮守の鋒建崇せしめ故、鋒之尾と稱す、渋谷良重⁽²⁴⁾此地を領せ

(13) 現・鹿児島県日置市

(14) 現・鹿児島県日置市

(15) 現・鹿児島県日置市

(16) 現・いちき串木野市

(17) 現・薩摩川内市

(18) 1368年

(19) 島津氏総州家6代当主島津師久

(20) 現・薩摩川内市入来町浦之名

(21) 4村は、現・薩摩川内市東郷町

(22) 現・出水市知識町一帯

(23) 現・さつま町

(24) 中世期、関東から渋谷五族が薩摩国の川内川中・下流域に下向し土着した。祈答院領主渋谷良重は、戦国期に蒲生氏と組み島津貴久と戦った。

し時は、馬を牧之外追出し、千臺川⁽²⁵⁾を渡り、虎居村⁽²⁶⁾に於て、馬追の式あり、島津左衛門督歳久⁽²⁷⁾の時は、船木村の街道に於て、馬追の式ありしと可、今其地を荳の元と稱す、慶長五年⁽²⁸⁾荳を牧内に移す、寛陽公⁽²⁹⁾の追風といふ名馬も、此地に産する所なり、今は邑主の私牧なり、

- ケ 牧場苑領主館より末の方、一里八丁余、
上之村⁽³⁰⁾にあり、周廻一里半、馬を養ふこと八十頭許なるべし、
- コ 穎娃野牧地頭館より巳方、二里許、
牧之内村⁽³¹⁾にあり、周廻十八町餘、毎年駒馬を収むる時、一頭を開門社⁽³²⁾へ献ずるといふ、
- サ 古牧場苑
嶽村⁽³³⁾にあり、海より半里許山上なり、上井氏日記⁽³⁴⁾に、貫明公天正十三年四月、向島へ馬追に渡海し給えること見江たり、先是當野狼害ありし故に、中絶し、去年再興ありしことを記す、其後此牧を本府吉野へ移す、
- シ 牧馬野領主館より寅方、一里十七町
垂水村、海潟村⁽³⁵⁾の地に係る、周廻六里六町に餘、馬数百頭許を放畜せり、
- ス 牧場野地頭館より辰己方、一里一町餘
和田村⁽³⁶⁾にあり、隣邑田布施阿多⁽³⁷⁾等の地に係り、周廻六里六

(25) 現・川内川

(26) 現・さつま町虎居

(27) 島津氏25代当主島津貴久の第3子で、のち豊臣秀吉の怒りに触れ自害

(28) 1600年

(29) 2代藩主島津光久

(30) 江戸時代の喜入郷は上村、下村の二村で構成され、上村の南西の一倉に、私領主肝付氏が喜入牧を経営した、

(31) 現・南九州市穎娃町牧之内、現・鹿児島市喜入町との境界近くに牧神岳（542m）があり、南側一帯は放牧場がある、

(32) 開聞岳をご神体とする開門宮は、古代、開聞岳南麓に設置されたが、慶長15年（1610）、現・指宿市開門町十町の地に再興され、枚聞神社と称されている、

(33) 現・鹿児島市桜島武町

(34) 『上井覚兼日記』（『大日本古記録 中』所収の212頁に、天正13年（1585）4月27日の出来事として、貫明公（島津義久）が「向島（桜島）御馬追ニ御渡海候」と記し、上井覚兼自身もお供し、主催した地頭川上源五郎が応接した、荳に追い込んだ馬は16匹で、取駒は1疋であった、一行は「未暮内に御着した」、

(35) 現・垂水市

(36) 現・日置市吹上町和田、和田地区には「荳口」「荳岡」言う牧に関する地名（小字）も残る

(37) 現・南さつま市金峰町田布施と阿多

町に餘れり、梅岳君⁽³⁸⁾此牧野を置かれ、馬数歳々に蕃息して、
今や凡二百頭を放畜す、

セ 福山牧野苑地頭館の東方、十五町餘

當邑廻村、佳例川村、及び隣邑、敷根⁽³⁹⁾、末吉、恒吉⁽⁴⁰⁾、牛根⁽⁴¹⁾
の四邑に係る、周廻十里半、十六町二十四間、本藩の内、牧場野
大一廣大の場所なり、其地山林郊原に連りて形状險夷一ならず、
馬數千二百餘頭を放畜せり、良馬を産す、毎年八月、當邑及近邑
の民夫を役して馬二歳馬を取る、俗に是を馬追といふ、本府より
厩屋の官吏を遣して、其事を掌らしむ、松山⁽⁴²⁾、恒吉、(筆者中略)
等の二十邑より民夫をだす、是を俗に申目立といふ、其役卒は、
壹萬千人餘を用ゆ、(筆者中略)野馬の山林處々に散在せるを追
逐し、都て衆馬を荳といへるに驅入る、其荳の形は、郊野の内に
地を掘て、左右を高くし、其入口は狭く、中邊は廣くして、群場
を驅り集る處とす、又其側に稍圓に堀たるに荳ありて、新に取得
たる駒を容るゝの處とす、凡此荳は、牧場野ヲ大小に隨て、廣狭
一ならず、當地の荳は、周廻七十六間あり、さて其荳の内に群馬
を驅入て後、勇健練習の者をして、群馬の中に其馬捕へ取て、是
を小荳へ入る、悉く駒を取終れば、其群馬を舊の如く郊原に放ち
出す、此馬追は、其形勢勇にて、殆ど軍陣の状に似たり、(筆者
中略)貫明公⁽⁴³⁾掌て國分邑⁽⁴⁴⁾より、當邑惣陳原へ御光越ありし
時、岡上より原野を遠望し給ひて、(筆者中略)其分界を定め、(筆
者中略)鹿屋邑の高牧野より、馬を移し放ちて、是を畜牧せらる
る、天正八年⁽⁴⁵⁾庚辰四月十四日、卯の時より牧馬場を開けり、

○牧場神祠 牧場苑中程の岡上にあり、毎年三月十八日を以て
祭祀す、(筆者中略)舊は此牧場の南原にありしに、安永を得
すして、其牧馬を廢す、故に、享和二年⁽⁴⁶⁾今の地に神祠を移

(38) 島津氏15代当主島津貴久の父・島津忠良の法名、「いろは歌」の作者として著名、

(39) 廻村～敷根までは現・霧島市

(40) 末吉・恒吉は現・曾於市

(41) 牛根は現・垂水市

(42) 松山は現・志布志市松山町

(43) 島津氏16代当主島津義久

(44) 現・霧島市

(45) 1580年

(46) 1802年

し建つ、

ソ 末吉野牧苑地頭館より申西方、三里

梶ヶ野村⁽⁴⁷⁾にあり、周廻五里二十町餘、南は恒吉に係る、西は福山に界す、牧場凡三百五十疋許あり、(筆者中略)安永八年⁽⁴⁸⁾、十月、櫻島火^{モエ}て、砂石降りし故、災害を受く、因て此苑を天明元年⁽⁴⁹⁾福山野牧馬苑へ合す、かくて此の苑を別に置^{モト}を故の如し、寛政元年⁽⁵⁰⁾笠祇神を此地に勧請して、牧苑の守護神とす、

タ 高牧野養馬苑邑主館より戌亥方、三十町餘

佐多之浦村、觸田⁽⁵¹⁾にあり、周廻一里二十二町、馬四五十頭を苑内^{カハ}牧神あり、

チ 青色野牧地頭館より巳方、三十二町餘

久徳米丸⁽⁵²⁾の兩村、及び山田帖佐⁽⁵³⁾の二邑に係る、周廻り二里半、馬匹凡六十許、春ごとに駒を取る、素より當邑の地最廣く亘り、當邑専其事に與る、山田帖佐は更々隔年此に役す、

ツ 牧場野領主館より寅方、一里十七町餘

垂水村、海潟村⁽⁵⁴⁾の地に係る、周廻三里餘、馬数百頭許を放畜せり、

テ 立目野牧馬苑地頭館より西方、十六町

伊座敷村⁽⁵⁵⁾にあり、周廻凡三里二十四町餘、東南は陸地にに接し、西北は沿海なり、其地形岩谷等多く、處々林叢ありて、平地少し、牧場數、凡百三十頭あり、此牧苑は元禄年中⁽⁵⁶⁾創闢すといふ、寶曆九年⁽⁵⁷⁾、新山神を小祠に勧請し、牧場の守護神とす、

(47) 現・曾於市末吉町梶ヶ野、梶ヶ野村は中之内村に属し、寛文4年(1664)の「郡村高辻帳」によれば、梶ヶ野には藩の馬牧である末吉野牧があった、当郷の諸役のうち、牧司や駒見廻りの下役が置かれていた、

(48) 1779年、(参考)『桜島大噴火』(橋村健一著、かごしま文庫⑬)所収53～54頁、藩から幕府への第二回目の報告書に、死者・田畑・果樹に加え、「死牛百三十五疋」「死馬千五百七十六疋」と記され、牧場は壊滅的打撃を受けた、

(49) 1781年

(50) 1789年

(51) 現・始良市始良町平松の九州自動車道「始良IC」付近、私領主は重富島津氏

(52) 現・始良市蒲生町の中心部付近

(53) 現・始良市の市街地付近(市役所、JR帖佐駅付近が帖佐、帖佐駅から北へ5.6kmの「凱旋門」付近が山田

(54) 垂水村、海潟村とも現・垂水市

(55) 現・南大隅町伊座敷

(56) 1688～1703年

(57) 1759年

ト 高牧野地頭館の北方、一里、

中之村、大窪村⁽⁵⁸⁾、及ひ十分の一、新城⁽⁵⁹⁾の地に跨て、總廻り四里五町餘、此馬牧某年始る事詳ならず、(筆者中略)慶長三年⁽⁶⁰⁾垂水の裨將川上六郎兵衛忠實、朝鮮の四川舊寨を守りしに(筆者中略)敵の馬を奪ひ騎る、(筆者中略)忠實帰朝の後、其馬を鹿屋高牧に放て父馬とすとも江たり、(筆者中略)此牧の馬は、唐種なること奇といふべし

ナ (大隅国馭謨郡屋久島)

走獸類 馬 山野各處に産す、栗生、長田⁽⁶¹⁾の邊最も多し、土俗にて、馬を畜置て物を負することなし、只土民水田を耕す時、山野における者を取て用ゆ、耕し畢て又舊の如く山野に放つ、

二 蘆野牧領主館より巳午方、三里餘、

住吉村安城⁽⁶²⁾にあり、周廻り一里四町、天正三年⁽⁶³⁾癸亥六月、大玄公⁽⁶⁴⁾、島主種子島藏人久時⁽⁶⁵⁾に、牛馬五疋を賜へり、久時此牧を置く、其馬を放畜し、後來繁殖して、今や牛數凡五十頭に及ぶ、

ヌ 牧野合記 大町野牧

山久村⁽⁶⁶⁾にあり、馬數凡百十餘、又野間村⁽⁶⁷⁾に本増野牧、住吉村⁽⁶⁸⁾に大峯野牧、此外島間村⁽⁶⁹⁾、中村⁽⁷⁰⁾にも牧野あり、

以上のように『三國名勝圖會』によれば、天保14年(1843)時点で、

(58) 現・鹿屋市高牧町

(59) 現・垂水市新城

(60) 1598年

(61) 現・屋久島町、栗生は南西海岸に面し、長田は現・永田のことで北西海岸に面している

(62) 現・西之表市安城(市の南東部に位置する)

(63) 1683年

(64) 島津氏20代当主・3代藩主島津綱貴

(65) 鉄砲伝来時の当主種子島時堯の子孫

(66) 現在地への比定不明?

(67) 現・熊毛郡中種子町市街地大字「野間」南隣の「高峯」～「広ヶ野」付近カ、『鹿児島県の地名』(平凡社、1998年7月2日発行)所収832頁に、本増野牧について「周囲三里一町、馬数一七〇、同牧では卯酉の日に馬追いが行われた。島主種子島市在島の折りは島主自身が見分した。」との記述もある

(68) 現・西之表市南西部海岸に面した住吉地区カ

(69) 現・南種子町北西海岸に面した島間地区カ、現・南種子町最南端の「崎原」に関して、『鹿児島県の地名』(平凡社、7月2日発行)所収829頁に、「崎原野牧は周囲三里で駄数六四。馬追いは西之村(現・南種子町西之)の御崎野牧に次いで行われ、馬追いの諸式は野間村(現・中種子町)の本増牧に同じであった。」との記述がある

(70) 現・南種子町南部を太平洋に注ぐ郡川の流域(「上中」～「下中」)付近に、その位置を比定したい、

藩領内に23ヵ所の「牧（野牧、牧馬苑）」が設置されており、放牧の馬数（頭数）は約4,200疋（頭）である。また、藩の経営牧は各現地の行政担当者である地頭が、私領主（島津氏一族及び有力家臣）の経営牧は領主が管理した。吉野牧では、馬の養育は「牧司」（別称も：末吉牧は「牧司や駒見廻役」）が担当した。他郷の牧も同様に有力農民の協力も得つつ、馬の養育に努めた。その際、『三國名勝圖會』に記述はないが、放牧馬を夏の暑い日差しや台風・豪雨等から守るための造林、水飲み場の設置や、定期的に若干の塩も置くなど諸種の配慮もなされた。

さらに、各牧の名称と所在地を、地頭館・領主館を起点として、方角と凡その距離を記述した上で、牧の範囲・広さを郷村名や「周廻り」（外周の長さ）で示し、放牧の馬数（疋、頭）や取駒数を記述している。さらに、主として大規模な牧は、その歴史や馬追いなど諸情報を加味している。

次に天保14年（1843）時点の『三國名勝圖會』と嘉永5年（1852）時点の『要用集』の両者を比較してみたい。まず、牧数に関しては、前者が23ヵ所、後者は17ヵ所である。但し、前者は屋久島に関して、馬は「水田を耕す時、山野における者を取て用ゆ、耕し畢て又舊の如く山野に放つ」と牧は設置されていない。加えて前者は、現・垂水市に該当する「牧馬野」は重複して記述しているので、実際の牧数は21ヵ所である。4ヶ所減少している。但し、私領主種子島氏の牧数は島内に散在する牧を合わせて1牧と数えた。馬数については、前者が約4,200疋（頭）、後者が6,273疋（頭）となる。前者のうち4牧には馬数の記述がないので単純比較は出来ないが、9年後は約2,000疋（頭）増加している。

7私領主経営牧について『三國名勝圖會』の記述を見ると、宮之城島津氏の「九尾野牧」、有力家臣肝付氏（幕末の家老小松帯刀の実家）の「牧馬苑」、重富島津氏の「高牧野養馬苑」、垂水島津氏の「牧場野」、入来院氏の「長野牧場苑」、種子島氏の「大町野牧」など、6私領主経営牧を紹介している。但し、都城島津氏については、日国諸縣郡内の「牧」について記述がなく、『要用集』にも記述がない。

また、「長野牧」（現・出水郡長島町）に関して、長島町教育委員会は、平成9年（1997）4月、東町川床の牧跡地に、寛永6年（1666）、2代藩主島津光久が行人岳（393m）麓に長島牧を設置したとの説明板を立

でている。＊2つの江戸後期の史料では記述がない。

なお、「牧神」を祭祀する牧神祠は、原則として、広大な敷地を有する牧を囲む山々の内、一番高い山の頂上に建立されている。若干の実例を紹介してみる。

まず、鹿児島城下に最も近い藩営「吉野馬牧（吉野）」は、現・吉野町と吉田町境に広がる牟礼ヶ岡（552.3m）の頂上に石の祠が残っている。その祠には「貞享二年三月十五日」と刻まれている（鹿児島市教育委員会が昭和59年3月発行の『鹿児島市内の史跡めぐり』76頁でも紹介）。この祠は1685年、2代藩主島津光久時代に牧の守り神（牧神）として建立されたことを示している。現・霧島市福山町に位置する藩営の「福山野牧苑」（『三國名勝圖會』所収）に関して、『福山町郷土誌』（昭和53年発行）は牧神を祀る祠の写真を添え（514頁）、住民がその祠を通称「牧神様」と呼んでいることも紹介している。さらに、後述する私領主肝付氏が設置した「喜入牧」についても、その周囲を囲む山並みの一番高い山頂に牧神を祀る祠があった。

このように、鹿児島（薩摩）藩領内では、藩営牧・私領主牧でも牧神を祀って放牧馬を大事に養育し、保護や改良にも努めていることが理解できる。

ところで、『三國名勝圖會』所収の諸記述から窺える牧などの特徴を若干述べてみたい。

1点目は、牧の敷地面積と放牧馬数はほぼ比例関係にあり、概して規模が大きいのは藩営牧で、規模が小さいのが私領主牧である。

（例）最大規模の藩営牧「福山野牧苑」は、外周が10里半16町余、馬数が約1,200疋、最少規模の私領主入来院氏の「長野牧場苑」は、外周が二里余、馬数が40～50疋である。なお、「福山野牧苑」は安永8年（1779）の桜島噴火により大被害を受け、ほどなく廃止された。

2点目は、外国産の馬を対象とする2カ所の牧があること。

（例）「^{ジャカタラ}咬啣吧馬牧」此志島村（現・鹿児島市皆与志町）の藩営牧及び「高牧野」中之村、大窪村（現・鹿屋市）及び十分の一、新城の地（現・垂水市）に係る藩営牧の2カ所である、

3点目は、「古牧場苑」嶽村（現・鹿児島市桜島武町）の藩営牧に狼被害が出たため、牧の中絶・再興等を経た後、牧の馬は鹿児島の「吉野

馬牧」にすべて移された。藩内の他野牧にも狼や野犬など野生動物による放牧馬への被害も考えられる。

4点目は、現・熊毛郡屋久島町（江戸時代までの行政区域名は、「大隅国^{コム}敷^ム郡屋久島」）について、『三國名勝圖會』の記述を要約すると、下記の通りである。

「馬について、山野の名所は、栗生・長田（現・永田、海岸の砂浜は海亀の産卵地として知られる）に多いが、牧は設置されていない。農民が必要に応じて野生馬を使役し、用が済めば野に放つ」状況であった。

5点目は、史料『三國名勝圖會』（上巻274頁）によれば、最初に現・鹿児島県内の地に牧を設営した人物は、島津氏初代当主兼薩摩国・大隅国守護となった島津忠久であった。島津忠久は、鎌倉で將軍源頼朝が開設した幕府に勤務していたので、家臣の本田貞親らを派遣して木之牟礼城（現・出水市野田町の国道3号沿い）を築かせて守護所とし、薩摩国統治の拠点とした。その際、本田貞親は「瀬崎野」牧の経営も開始した。のち、蒲生合戦で15代当主島津貴久が騎乗したのが「瀬崎野、つき毛」であった。藩政時代の藩営牧の中で最も古い歴史を有する牧が瀬崎野牧場苑となる。

3 喜入牧の荳跡

— 私領主肝付氏経営の喜入牧と中核施設の荳跡の現況 —

（1）所在地

喜入郷上之村の西側丘陵地一帯。現・鹿児島市喜入一倉町の西側丘陵地一帯に位置し、一倉小学校・一倉公民館等を中心とする集落の少し先の施設、鹿児島市観光農業公園「グリーンファーム」敷地にほぼ該当する。南側の境界は鹿児島湾に注ぐ八幡川である。この地は、旧喜入町時代、町が「喜入の杜」として保存に努めた。平成16年（2004）年11月1日、鹿児島市に編入合併後は、鹿児島市が経営する「グリーンファーム」が荳跡の外周を示す土塁及び内側窪（凹）地の保存・継承に努めた。

馬の放牧場全体の「喜入牧」跡は、現在、諸施設（研修室、物産館、レストラン）等や道路・駐車場として整備され、観光客や地域住民が多数訪れる賑わいの場となっている。

「喜入牧」の全体像は、現在でも当時の面影を想起出来る。毎年肝付氏が開催する馬追い行事の取駒の中核施設であった苙跡は、西側斜面にキャンプ場施設が設営され、その一角の窪地はキャンプファイヤー場となっている。その窪地を囲む土塁が苙跡である。現在もほぼ原型を保った状態にある。明治時代の当地域の字図には「旧牧」と記され、境界周囲の北側に2カ所「外戸ノ口」、東南側に1カ所「外戸ノ下」と記されている。

この記述から、喜入牧の中を藩政時代は生活道路が東西に通じている。人々が喜入牧の3カ所の出入口の木造扉を開け閉めして、放牧馬が逃げ出さぬよう気を配りながら、喜入郷・知覧郷・穎娃郷の間を往来していたことが分かる。

(2)「苙跡」の地形と現状

窪地周囲を囲む土塁3個がほぼ原型を保つ。＊鹿児島市教育委員会文化財課作成の図面や写真を参照

- ア 牧全域の高低：県道223号の信号機付近から東南側に傾斜している。苙の中心部の等高線の高度は240m前後である。
- イ 苙の配置等：牧の南側に3個の土塁で構成、大苙（内径→南北約40m×東西約85m）、中苙（大苙内の東側、内径約22m×18m）、小苙（大苙北側土塁の突出部で構成、内径約8m）
- ウ 苙の土塁：底辺約4～5m、高さ約1～2m前後、＊断面は台形、やや風化しており、一部に破損が見られる。

宮崎県が昭和11年（1936）7月17日指定した、都農町の天然記念物（史跡）「旧藩都農牧駒追込場跡」や国が平成19年（2007）2月6日指定した、千葉県鎌ヶ谷市の天然記念物（史跡）「下総小金中野牧跡」と比べても土塁の保存状況はそんな色ない。

(3) 苙の機能

大苙は馬追い時の追込み場で、追込み口が左右とも約10mの長さで外に向け開いて（漢字の逆八の形で）造られ、放牧馬群を追込み易いよう工夫を凝らしているのが特色である。中苙・小苙は二歳馬（若駒）の選別場として活用された。

(4) 喜入牧に関する主な歴史史料

ア 『鹿児島県史料旧記雑録後編一「山本氏日記」』(15頁)

「十一日、喜入野々駒新正八幡へ御祈進候」とある。これは、島津氏15代当主の島津貴久が、蒲生合戦(1554～57)中の弘治元年(1555)年5月11日、戦勝祈願として喜入牧の馬一疋を寄進した。戦国期、すでに島津氏家臣の喜入氏が喜入牧を経営していたことを示す貴重史料である。なお、喜入氏は文禄4年(1595)、豊臣秀吉の太閤検地により、永吉郷へ移封となり、その後の藩政時代には、肝付氏が代々喜入郷を統治した。

*参考 蒲生合戦中の弘治2年(1556)11月25日、島津氏家臣本田丹波守が騎乗したのは「瀬崎野(現・出水市知識町付近)のつき毛」であった。

このように、戦国期の島津氏及び有力家臣は、鹿児島城下近くの吉野牧の馬追いで捕獲(「取駒」)した馬のみでなく、島津氏統治下の各地の牧で養成した馬も活用していたことも窺える。

イ 『三國名勝圖會 卷之二十』(上巻343～44頁)

島津氏による藩政時代、有力家臣の肝付氏は代々私領主として、肝付郷の統治を認められ、喜入牧を経営した。その記述を再掲載する。

「牧場苑領主館より末の方、一里八丁余 上之村にあり、周廻一里半、馬を養ふこと八十頭許なるべし」:(要約) 喜入牧は、領主館より南々西の方角に約4.8km、上之村にあり、外囲は約6 km、馬は約80頭が放牧されている。

ウ 『鹿児島県史料集(22)小松帯刀日記』(53頁)

*参考 小松帯刀は、喜入郷の統治を島津氏から許可された私領主肝付氏の出身で、島津氏28代当主・11代藩主島津斉彬の命により、日吉郷私領主小松氏の婿養子となり、幕末には鹿児島藩の家老として京都に常駐した。さらに、12代藩主島津忠義・国父島津久光の代理として、西郷隆盛・大久保利通らの協力を得つつ薩長同盟の締結や朝廷・徳川将軍家、有力諸侯らを斡旋・調停して、慶応3年12月に、15代将軍徳川慶喜の大政奉還及び王政復古の大号令・将軍の辞官納地を決定して、天皇中心の政治体制を築く大きな役割を担った。

この小松帯刀が、万延元年（1860）、実家に帰省して、肝付氏が経営する喜入牧の馬追いを観覧したことを、簡潔な記述で日記に残している。

「四月八日 曇 一 為馬追四ツ過ヨリ牧エ差越麓迄帰り候尤馬追ニモ至而首尾能相濟候事」（月日、天気以外の記述の要約）馬追い行事を観覧するため、午前10時過ぎ、実家の麓から喜入牧に出向き、終了後に実家に帰った。喜入牧での馬追いは、計画通り実施され無事終了した。小松は、前日の七日に実家に一泊し、八日の夕方、麓の実家を立派にして、「鹿府」（鹿児島藩庁）のある自宅へ「四ツ前」（午後10時前）に帰り着いた。

（５）喜入牧の馬追い行事の概要

『喜入町郷土誌』（205～206頁、633頁の要約）＊初見及び廃止年は不明、年1回、4月実施

ア 宝永4年（1707）

- ・当日は郷民総出して、人々を五組に編成し、士族（私領主の家臣である家中士）が「押伍」（全体指揮者）となる。
- ・各組頭は馬に乗り、組員を指揮する。一の組は前平、二の組は陣之尾・中野平、三の組は長尾頭、四の組は長尾、五の組は鍋尾の部署に就く。＊明治時代の「字図」に「陳之元、長尾、鍋尾、鍋尾山野」があり、牧の高い位置境に該当する。
- ・総指揮者の下、各組は旗や法螺貝の合図で牧周囲を包囲し、各組と連携しつつ、小旗や竹木を打ち振り、大声で関の声をあげながら、徐々に馬を「荳」の中に追い込んで行く。
- ・この時、駒取役を担う家中士で当年16歳の凛々しい装束の兵子衆が牧神ヶ岡より駆け下り、大荳の中を走りまわる仔馬（二歳馬）に飛び乗り、首や足に絡みつくなどして、仔馬を取り押さえて首に紐をかける。周囲の大観衆は大声をあげ、手や旗・竹木等を振りつつ声援した。
- ・この後、業務（官馬）用に必要な二歳馬を選別して中・小の荳に入れ、衆馬（成人の馬）と二歳の牡馬は牧に放つ。業務用に余りが生じた際は、一般用として入札で払い下げた。

島津氏の藩営牧の概要及び肝付氏の喜入牧の荳跡現況

- ・馬追いの日は、私領主の肝付氏も鹿児島市から帰郷して観覧するのが通例であった。郷内の老若男女も勇壮で盛大な馬追いの見物を何よりの楽しみとしていた。
- イ 享保3年（1718）4月26日の馬追いの結果
- ・母馬47、父馬5、当歳（二歳）馬11、取駒3、計66匹

（6）「喜入牧の荳跡」史跡指定に向けた鹿児島市教委取組みの概要

- ア 喜入町時代：平成10年（1998）、「旧牧の荳」の名称を付けて、町教育委員会が『喜入町の文化財』に掲載し、荳の保存に努めた。
- イ 平成16年（2004）11月1日、喜入町が鹿児島市に編入合併して、旧牧及び馬追いの中核施設の荳跡の地は、鹿児島市グリーンツーリズム推進課（鹿児島市観光農園）の管轄となった。
- ウ その後、現地の市観光農業公園（グリーンファーム）から、荳内に植樹計画やキャンプファイヤーの実施が可能かとの相談を市教育委員会文化課が受けた。
- エ 市教委文化課では、荳の形状の原型を留めた貴重な例であると認識し、文化課職員の立会いもとで、専門業者の測量と平面図・断面図を作成。
- オ 平成26年（2014）7月、市指定に向けて、文化財審議会中野委員が依頼により、同年8月20日、文化財課担当職員と現地の状況等の確認調査実施。＊平成26年度、文化財課となる、
- カ 平成26年9月2日、第1回文化財審議会にて、これまでの調査結果の説明及び委員の意見交換後、指定に向けた調査の継続を確認。
- キ 平成27年（2015）1月23日、中野委員と文化財課担当職員が宮崎県都農町の県指定文化財「旧藩都農牧駒追込場跡」を町教委の案内で調査。
- ク 平成27年1月28日、中野委員と文化財担当職員が霧島市の「福山牧跡」を霧島市教委職員・霧島市文化財審議会前田委員の案内で主要な牧跡地を調査。
- ケ 平成27年2月3日、中野委員と文化財担当職員が再度「喜入牧と荳跡」に出向き、キ・クとの比較調査を実施。
- コ 平成27年2月16日、文化財担当職員が千葉県鎌ヶ谷市教委職員の

案内で、国指定「下総小金中野牧跡」の主要な牧跡の調査実施。

サ 平成27年8月24日、第1回文化財審議会にて、「喜入牧の苙跡」の指定に係る諮問・答申について協議。

シ 平成27年9月2日、鹿児島市が史跡指定を決定。

ス 平成27年11月、鹿児島市教育委員会が現地の「喜入牧の苙跡」地に、地形測量図と馬追い行事の想像図4図を添えた解説板を建立。

*解説文は丁寧かつ平易な文章とし、難読語句にふり仮名をつけた。

おわりに

鹿児島（薩摩）藩では、初代藩主島津家久以降、馬に関する行政機関として、鹿児島（鶴丸）城本丸（現・黎明館の地）の北隣り（現・鹿児島医療センター）の地に厩が設置されていた。そこでは藩の馬を預かり養育・調教を担当する「馬之役（馬預）」が任命された。

2代藩主島津光久時代は、「馬預」や「馬屋奉行」が任命され、二棟の厩を建て、馬八十疋を収容して、上・下の厩を管理する「別當」が任命された。その後、享保廿年（1736）に「馬方」、安永七年（1778）に「馬預」と改称、さらに文化十一年（1814）に小納戸頭の内から兼務者を決めた。馬預の数（担当者）は六名で、馬乗・馬医・検者・筆者・藏役等で構成された。*以上は『鹿児島県史 第二巻』の482～433頁を要約した。

藩営牧から「取駒」（二歳の若駒）した馬は、藩庁の厩で養育・調教され、特に優れた馬は藩主の乗馬用として、その他は藩の家老級及び支庁（地頭館）の地頭など上級役人や島津氏一族用として活用された。余裕ある時は一部の馬は売買された。私領主牧から「取駒」した馬も、領主や領主一族及び上級家臣用として活用された。このように、牧の経営は藩主や私領主にとっては業務用官馬の確保として、有力農民や物資の運搬業者にとっても陸路を往来する交通手段として、馬が重要な役割を担っていたことが理解できる。

また、鹿児島（薩摩）藩領内各地の牧や各私領主の牧で、毎年1～2回実施される「馬追い」は、各郷の全住民が業務分担し、残りは観客として参加する最大のイベントである。大苙に飛び込んできて逃げ廻る「駒取」を担当する城下士・郷士や家中士の若者にとっては、まさに模擬戦闘（「其形勢勇にて、殆ど軍陣の状に似たり」福山野牧苑の記述）・

士気高揚の場となった。それを周囲で観戦する住民にとっては、郷内総出の娯楽の場となった。藩主・私領主の統治上からも「馬追い」は、身分を問わず一体感を高める良い機会ともなった。

しかし、明治2年（1869）の版籍奉還、明治4年（1871）の廃藩置県により、中央集権体制を目指す明治政府が誕生した。交通手段も鉄道の開通、道路整備とバス・トラック等の普及、ラジオ放送開始や各種の新娯楽も誕生した。これらの社会変化により、馬の需要は激減して牧経営と毎年の馬追い行事はその役割を終了した。

藩政時代の主要な牧（牧場苑）跡の活用状況は次の通りである。鹿児島城下に最も近い藩営「吉野牧跡」（現・鹿児島市吉野町及び宮之浦町）は県立吉野公園・南国カンツリークラブ・鹿児島市立寺山ふれあい公園及び牧跡を示す名称の牟礼ヶ岡団地・島津ゴルフ倶楽部などとして活用されている。藩営「福山牧跡」（現・霧島市福山町）は、広大な敷地の外周を示す溝・土塁跡や「牧野」・「牧之原」などの字名が残り、一部は桜島カントリークラブ（現在は廃止）・陸上自衛隊国分駐屯地福山演習場等として活用されている。

また、県内各地に牧跡を示す「牧」「牧野」などの大小の字名も残っている。さらに、牧内に外周を土塁で囲んだ窪地（凹地）の荳跡を示す「本荳」「荳之元」「荳迫」「荳」などの小字も各地に残っている。藩営「牧馬野跡」（現・日置市吹上町）に残る小字「荳口」「荳岡」も代表的な小字である。

現在では各地に残る大小の字名が、藩政時代の「牧」経営や「馬追い」の中核施設跡を示す歴史的事象の名残を後世に伝えている。

*** 参考資料**

『鹿児島市の文化財（六訂版）―鹿児島市内の指定文化財の解説―』

（2020年3月 鹿児島市教育委員会）所収「喜入牧の苜跡」（156頁）

資料提供 鹿児島市教育委員会

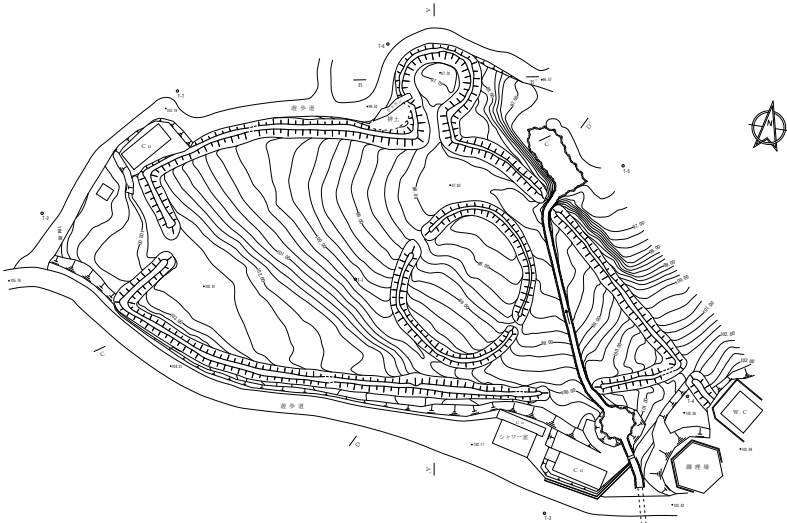


喜入の苜



喜入牧の苜跡

島津氏の藩営牧の概要及び肝付氏の喜入牧の荳跡現況



鹿児島市喜入町 苙跡地形測量図

(県立図書館史料集刊行委員)

